

邪馬台国所在地論 再考

江原 幸雄

1.はじめに —邪馬台国所在地論 最新の考え方—

邪馬台国所在地論は、江戸時代中期以降、現在まで、諸説入り乱れている。1910年以降、議論が進み、主として、北九州説あるいは畿内説の二説に整理されてきてはいるが、大方の賛意が示される所在地（北九州説か畿内説か）は現在でも特定されていない。このような中で、2020年12月に発行された、古代史の総合雑誌「季刊 邪馬台国 139号」では、この問題を直接論じているわけではないが、総力特集「その南に狗奴国あり 邪馬台国と対峙した狗奴国を追って」の中で、狗奴国との関係で、邪馬台国の位置についても議論が及んでいる。そのうちの総括的三論考（小澤、2020、安本、2020、関川、2020）を紹介するとともに、これらの基盤にたって、邪馬台国所在地の私論を紹介したい。

2.季刊邪馬台国 139号中の三論考の概要

2.1 小澤 毅 氏による「『魏志（魏志倭人伝の略。以下、『魏志』と略す）』が語る狗奴国と邪馬台国の所在地」（139号、6～17）

小澤氏は、従来の所在地論では出発点となる『魏志』を無視した議論も目立つとまず指摘する。そもそも、国名や地名などの固有名詞は考古学から明らかにしえない以上、狗奴国や邪馬台国ほかの国々の比定も、当然、根本史料である『魏志』を無視しては成り立たないとしている。その結果、『魏志』では、伊都国まではすべて里程、国名の順に記載されている。また、伊都国以降は、そこを起点とした各国までの道程を表記したとみるのが妥当であろうとしている。さらに、『魏志』冒頭に登場する国々のうち、所在地に関して意見が大きく分かれるのが「投馬国」と「邪馬台国」とし、狗奴国の位置に関しては、狗奴国の主な領域は令制の肥後国（熊本県）と考えて誤りないだろうとしている。さらに、狗奴国およびその北に位置する邪馬台国が九州に存在したことは確実であり、両国をこれ以外の地に求める説は成立しがたいと考えている。したがって、小澤氏は、邪馬台国、狗奴国ともに九州北部にあると結論している。

2.2 安本美典 氏による「『狗奴国＝肥後熊本説』—もっとも根拠が多く可能性の大きい説」（139号、18～44）

安本氏は、狗奴国は熊本県などにあったとする説は、江戸時代の新井白石以来、明治以降の白鳥庫吉、内藤湖南、井上光貞、小林行雄など、歴代の碩学によって唱えられてきた説であるとしている。

そして、古代の郡名以上の大地名で『魏志』の記述に関連するとみられる「くま」と「くち」との両方が、そろって存在している地域は、「肥後の国（熊本県）」以外に存在して

いないと述べる。また、「狗奴国＝肥後熊本説」は他の諸説にくらべ、文献学的、考古学的根拠を、もっとも多くあげることができ、可能性がもっとも大きい説であると考えている。『魏志』では「女王国の南に狗奴国ありとなっていること」から、邪馬台国は狗奴国（熊本県）の北すなわち福岡県を想定している。氏は別の文献では、さらに絞り込み、福岡県の朝倉市あたりとしている（安本、2015）。

2.3 関川尚功 氏による「近畿大和からみた狗奴国」（139号、45～60）

田辺昭三氏（1968）の狗奴国東海説、邪馬台国大和説は、近年の考古学的資料を見ると成り立ちがたいとまず指摘している。邪馬台国の位置が会稽・東冶の東にあるという『魏志』による理解は大きくいえば呉にかなり近いという認識であり、そのため対呉の戦略上、邪馬台国はかなり重要な位置にあるとみなされていた。倭の所在するところが、会稽・東冶の東というのであれば、邪馬台国のおよその位置は、現実の地理にあてると、（朝鮮）半島南部以南の九州北部から南西諸島の付近の、呉の東方海域までの範囲に存在したことになる。そうなる日本列島において、この邪馬台国の位置に当てはまる地域となれば、九州（北部）しか考えることはできない（図1）。邪馬台国と抗争関係にあった狗奴国は、学史を振り返ると邪馬台国大和説・九州説問わず、いずれも九州中部に所在する国とする見解が多いという。一方、田辺氏の著書（1968）以降に明らかになった考古の実態より、邪馬台国大和説は成立しがたいと論じている。したがって、邪馬台国は九州内ということになる。『魏志』によれば、狗奴国は邪馬台国の南にあることから、邪馬台国は九州北部ということになる。

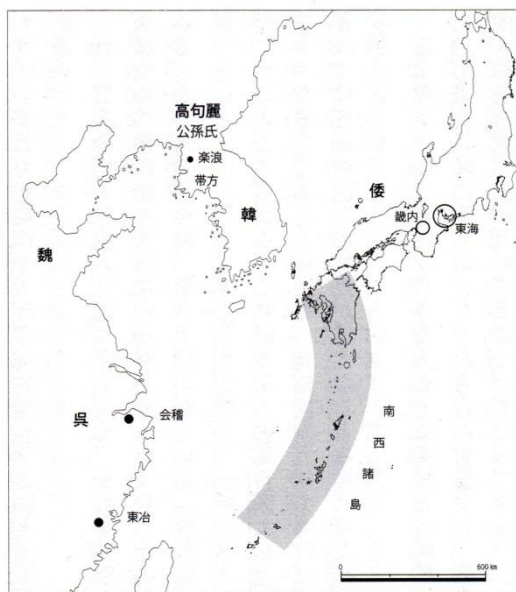


図1 現実の地理にもとづく邪馬台国の所在範囲（影を付けた部分）（関川、2020）

2.4 三論考からの帰結

前節で、統括的三論考は、邪馬台国はいずれも九州北部にあったとしており、中でも、安本氏は福岡県の朝倉市近辺まで絞り込んでいる。したがって、現時点において、邪馬台国の位置は九州北部で、さらに詳細には、福岡県朝倉市近辺が想定されているという理解が合理的と考えられる。

3.魏志倭人伝中の邪馬台国の所在地に関する各論

いわゆる『魏志』の中には邪馬台国の所在地に関する重要な記述がなされ、いろいろな視点から議論されているが、依然統一的な見解が得られていない。以下では、従来必ずしも十分指摘されていない事項、あるいは従来から指摘されてはいるが、必ずしも本質的に重要であるとは指摘されていない事項、さらには、魏志倭人伝に直接記述されているわけではないが、邪馬台国の所在地を考える上で重要と考えられる事項について記述したい。

3.1 帯方郡から邪馬台国までの距離

『魏志』では、帯方郡を出発し、韓国を経て、対馬海峡を島伝いに船で渡り、末慮国に着き、さらに、陸上を歩き、伊都国を経由して、奴国、さらには不弥国（現在の宇美町付近か）に着くとされている。それぞれの区間の距離はいずれも「里」で表現されており、中国の役人は、実際にそれらを訪れるなどして、比較的信頼のおける距離を示していると考えられる。

旅程の区間ごとの距離の数値を見ると、帯方郡から狗邪韓国まで 7,000 余里、狗邪韓国から対馬国まで 1,000 余里、対馬国から一支（壹岐）国まで 1,000 余里、一支国から末慮国まで 1,000 余里、末慮国から伊都国まで 500 里、そして、伊都国から奴国まで 100 里、奴国から不弥国まで 100 里とされている。記述された数値は丸められたものであり、7,000、1,000、500、100 となっている。7,000 余里とは 7,000 里から 8,000 里の間、1,000 余里とは 1,000 里と 1,500 里の間、500 里とは 400 里と 600 里の間、100 里というのは 50 里と 150 里の間程度を示すものと考えられる。このように考えると、**帯方郡から不弥国までは、最小 10,500 里、最大 13,400 里程度**になる。一方、帯方郡から邪馬台国までは、12,000 余里とされており、**最小 12,000 里、最大 13,000 里程度**になる。したがって、不弥国から邪馬台国までの距離は、かなり近いと推定され、1,500 里を超えない程度と考えられる。

当時（『魏志』）の 1 里は現在のどの程度の距離に相当するかが問題であるが、比定地が比較的信頼できる地点間の地図上の実距離に基づけばおおよそ 80m 程度である。したがって、邪馬台国の位置は、不弥国から、120km（=80m/里 X 1500 里）を超えることはないと考えられる。実際は 60±60km を想定すればよいのではないかと思われる。その位置を九州北部で平地のある地域とすれば、東方であれば現在の福岡県豊前市、南東方向であれば大分県日田市、南方向であれば福岡県大牟田市あたりまでであり、これらと宇美町を結ぶ途中に邪馬台国があるとするのが妥当である。これらの領域で、70,000 戸という家を含むことのできる広大な平野は、現在の福岡県小郡市、朝倉市、久留米市、柳川市、筑後市さ

らには佐賀県佐賀市を含む地域一帯が想定される。これらの地域の中で、現在に至るまでの中心都市は久留米市であり、邪馬台国は久留米市近辺の筑後平野の一角であろうと推定される。

3.2 「南の投馬国へは水行 20 日、南の邪馬台国へは水行 10 日陸行 1 月」

帯方郡から出発し、奴国あるいは不弥国までの距離は「里」で表現され、邪馬台国は久留米市近辺の筑後平野のどこかではないかと推論される。不弥国からは余り離れていない（1,500 里程度以内、すなわち 120km 程度以内）。もしそうであれば、不弥国の記述に続き、邪馬台国までの距離は、方位とともに「○（方位）行して（『魏志』の以後の記述からすれば「南行して」となるのではないかと）邪馬台国まで○○○○里」としてもよさそうである。

しかし、『魏志』ではそうではなく、それ以降は距離の書き方が改まり、「南の投馬国に行くには……、そして、南の邪馬台国に行くには……」となっている。しかも、「水行」が先行している。まず、一つの解釈は、中国の役人は実際には不弥国から陸路で邪馬台国に行っていない（伝聞もない）。もし、実際に行っていたら（あるいは伝聞があれば）、「南行して、邪馬台国まで 1,000 余里」のように記述したと考えられる。

倭国に來た中国の役人が倭国の最重要国「邪馬台国」に行かなかった理由は何か。まず、末慮国に船で着いて、陸行して邪馬台国に至るには、非常に大変な行程であったことが考えられる。これは、たとえば、末慮国から伊都国へ行く連絡道路であっても、「前に行く人が見えないような獣道」であり、弥生時代には、国同士の連絡道路は徒歩ではかなり難儀なものであったのではないかと。したがって、中国の役人は、通常邪馬台国へ行っていないし、陸路で、末慮国から邪馬台国に向かうことは全く想定しなかった。

末慮国から先の遠方の地は、出来る限り、水行が選択され、必要な場合は、それ以降を陸行すると考えられていたのではないかと。倭国へ來た中国の役人にとっては、職務上、邪馬台国に直接出向く必要はなく、伊都国まで行けば十分であった。伊都国から先は、倭人の役人の役割であったのではないかと。そのために、伊都国に一大率という対外的出先機関の長が置かれていた。そして、必要性あるいは特別の興味があったごく一部の中国の役人のみが奴国または不弥国まで行くことがあったのではないかと（あるいは、倭人からの伝聞があった）。そのような一見あるいは百聞に基づいて、それぞれの国までの距離や戸数を記述したのであろう。弥生時代には、末慮国から、邪馬台国より手前（北にある）の伊都国、奴国さらには不弥国に陸行するには大変な労力が必要とされたと考えられていた。

そのような状況が、「南の投馬国へは水行 20 日、南の邪馬台国へは水行 10 日陸行 1 月」という記述を生み出したのではないかと。投馬国まで水行 20 日であるが、水行だけであるから、投馬国は海岸に近い所にあるのではないかと。一方、邪馬台国は、水行後、陸行が追加されており、海岸近くではなく、内陸にあると考えられる。そして、この陸行 1 月は道路が整備されている現代感覚からすれば非常に長いと、国と国との連絡道路は「前に行く人が見えないような獣道」であり、実際の距離はそう長くはないのではない可能性がある。

さて、投馬国まで水行 20 日、邪馬台国まで水行 10 日となっており、邪馬台国までの水行による距離は投馬国までのおおよそ半分である。そして、水行であるから、起点は港であり、中国の役人が日本に上陸する「末慮国」の港から出発すると考える（中国の役人を主体に考えるべきと思われる）。すなわち、中国の役人の想定では、投馬国、邪馬台国は末慮国の港から水行で南に向かう。水行のルートは二つが考えられる。九州の西側沿岸を進むルート（西ルート。こちらのほうが中国の役人にとっては想定しやすいのではないかとと思われる）か、東側沿岸を進むルート（東ルート。『魏志』によれば、九州より東側に倭人が住んでいることが記述されており、中国の役人が東ルートを想定することも否定できない）である。西ルートであれば、末慮国の港を出発し、壱岐水道を通り、五島列島の東沖を通り、天草灘を経て、薩摩半島方向へ向かう。一方、東ルートであれば、末慮国の港から玄界灘に出て、関門海峡を渡り、豊後水道、そして、日向灘を経て、大隅半島に向かう。薩摩半島あるいは大隅半島を超えてさらに南に進めば、九州本島からは離れてしまい、投馬国あるいは邪馬台国にたどり着くことはできない。すなわち、『魏志』で想定している、末慮国の港から九州の南端までの距離(日数)は高々20日である。海上距離で数100km(600km程度か)離れた地点を20日で行くとすれば、1日の平均航続距離は30km程度となる。これは遅いようにも感じられるが、航行は日中だけであることを考えると、さらに、不順な天候の日、あるいは停留地で歓待をされたりすること等もあるとすれば、必ずしもそうとは言えないだろう。また、距離の記述は20日、10日という丸めた数字であり、一般に誇張して書かれる中国書の記述を考慮すると、実際にはもっと短い可能性がある。なお、この種の不確かな議論を続けることはあまり実りが無い。

そこで、別の観点から考える。邪馬台国とともに記されている投馬国とはどんな意識を持って書かれたのであろうか。おそらく、邪馬台国よりも南方遠くにある大きな国であるとの認識ではないか。実際、『魏志』には戸数50,000余戸とされており、『魏志』の中では、邪馬台国に次ぐ大国として記述されている。50,000余戸という数値はともかく、邪馬台国より南の九州島内に大国があったということになる。そして、その国は海岸に面している。弥生時代の九州南部に大国があり、海岸に面した国に、多数の人が住んでいたというのである。

実はこのことを実証的に議論するための重要なデータが存在する。それは、小山・杉藤(1984)による、弥生時代の九州地方の人口密度分布である。それを図2に示した。この図は極めて興味深い。それは弥生時代の九州島における人口集中部は主として2か所あり、一つは、筑後平野から熊本平野を通り、八代平野にかけての有明海東岸地域であり、もう一つは、宮崎県南部の日向灘に面する、現在の日南市、南郷町、そして串間市あたりを含む地域である。この有明海東岸地域と宮崎県南部沿岸地域とが弥生時代の九州島における二大中心地とするならば、邪馬台国は有明海東岸地域にあり、投馬国は宮崎県南部の日向灘に面した地域に相当する。これらの国々に、前述した西ルートあるいは東ルートで向かったのではないか。邪馬台国へは、上陸後陸行の必要がある。それも1カ月という比較的

長旅が必要である。これについても、「前に人が見えない様な獣道」を考えると、実際には、それほど長距離と考える必要はない。しかしながら、西ルートを考える場合、有明海東沿岸から上陸して陸行すると、弥生時代に最も人口密度の大きい地域を横断することになり、陸行 1 月はやや長いと感じられる。その場合は、東ルートということになる。東ルートで向かい、別府湾あたりで上陸し、西に向かって、邪馬台国に向かうことが考えられる。別府湾から現在の湯布院町、九重町、日田市を通る山際の低地を進み、朝倉市に向かうルートが想定される。ほぼ現在の国道 210 号線に沿うルートである。別府湾で上陸して現在の日田市を経由し、邪馬台国が含まれる有明海東岸の内陸部に到達するのに 1 か月くらいかかると思う。

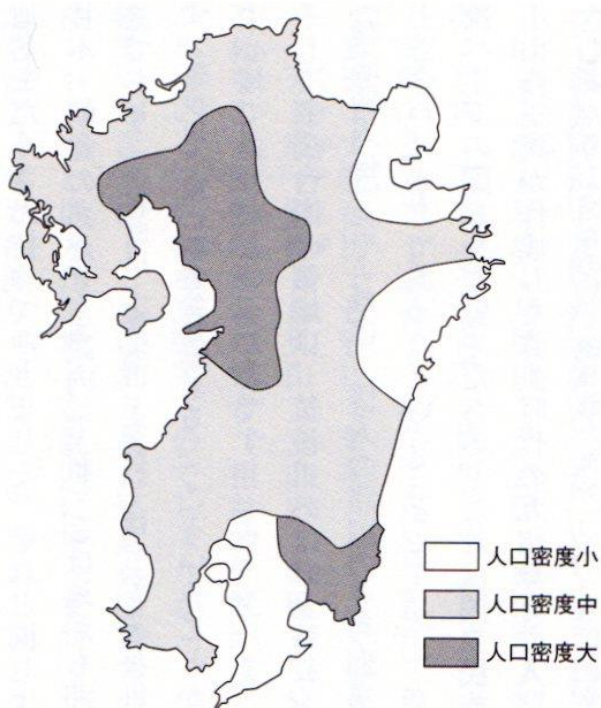


図2 弥生時代の九州の人口密度分布（小山・杉藤、1984）。

しかし、この場合、何故そのような難儀な陸路を選択するのかという単純な疑問が残る。可能性の一つとして、有明湾東海岸から上陸した場合、隣接している狗奴国（邪馬台国と敵対関係にある）の警備兵等から攻撃を受けることが挙げられる。

一方、別府湾で上陸せずに、そのまま南へ進めば、やがて、日向灘南部に達し、現在の日南市近辺に到達する。末慮国の港から別府湾までの距離は末慮国の港から日南市沖までのちょうど半分くらいであり、水行 10 日と水行 20 日に対応している。なお、ここでは、邪馬台国および投馬国に到達する水行のルートとして九州東海岸のルートも想定したが、西ルートがより可能性が高い（中国の役人にとっては、より親しみやすいのではないかな）のではないかな。ただ、『魏志』には、女王国より東に海を挟んで倭人が住んでいると記されており、東方に関する認識もあり、倭人も含めて、東ルートをとる可能性もなくはないと

考えられる。

ここで大事なことは、邪馬台国は内陸にあり、投馬国は海岸付近にあり、水行の距離は、邪馬台国までは、投馬国までのルートのおおむね半分くらいであることである。そして、末慮国の南方（九州島内）に、邪馬台国も投馬国もあるということである。

3.3 問題点 倭国に来た中国の役人が倭国の最重要国「邪馬台国」に行かなかった理由は何か？

その理由としては、邪馬台国は倭国の中では、卑弥呼の出身国という以外に特に政治的には、重要性がなかったのではないか。帯方郡の使いは通常伊都国に留まることになっていた。外交および内政をつかさどっていたのは、伊都国に駐在する倭国王であった。邪馬台国が倭国の最重要国であったとすれば、遠いかどうかよりも帯方郡の使いは邪馬台国へ行くのが自然ではないか。すなわち、邪馬台国そのものは倭国の中では政治的には重要性がなかった。単に卑弥呼の出身国であった。卑弥呼は共立されて倭国の王に就いた後、代々、王が駐在することになっていた伊都国に移り住んだのではないか。卑弥呼のいなくなった邪馬台国は長官の伊志馬が治めたのではないか。『魏志』には伊都国には代々王がいると記述されているが、他の国についてはそのような記述はない（ただし、長官はいる）。当時の倭国では、倭国を構成する諸国の王が、合議によって倭国王を推挙し、選ばれた王は出身国から離れ、伊都国に駐在することになっていたのではないか。卑弥呼はそれに従って、邪馬台国から伊都国へ移り住んだ。そして卑弥呼は伊都国で倭国王の職務を果たし、伊都国で死んだのではないか。墓の候補は、伊都国平原遺跡の女性（王妃）の墓ではないかと推定されている「三雲遺跡群（三つの王墓あり。今後さらに発見される可能性あり）の一つではないか」。この三つのうちの王の甕棺と並んでもう一つの大きな甕棺が見つかった。二つの甕棺は溝で囲まれた区画の中にあり、この甕棺にも22面の前漢鏡と玉類があったが武器類はなく、王妃の墓と推定されている（卑弥呼時代である弥生後期の墓式は箱式石棺が主流との指摘もあり、この点からすると、やや問題であるが）。紀元前一世紀（三世紀？）の合葬墓としての王墓である。なお、甕棺が平均より大きいのは、王妃が大柄の女性だったことを示唆しているという（森浩一、倭人伝を読み直す、110ページ。全207ページ、ちくま新書（2010年））。なお、死後の卑弥呼が邪馬台国と関係はなかったのか。そうではなく、倭国王としては伊都国平原遺跡に葬られたが、邪馬台国でも葬儀（分骨？）がなされたのではないか。その墓がたとえば、福岡県朝倉市にある恵蘇八幡宮の円墳である。したがって、卑弥呼は平原遺跡に葬られたが、故郷（邪馬台国）にも墓が作られたのではないか。

『魏志』には邪馬台国の記述が少ないのは、邪馬台国は、倭国の中では政治的に重要ではなく、首都（伊都国）から離れた普通の一国（単に卑弥呼の出身国）であることによるのではないか。

3.4 「女王国の東、海を渡ること1,000余里、また国があり、みな倭種である」

女王国である邪馬台国は九州島の中にあると考えるのが素直な推論である。そして、女王国の東方に海があり、1,000 余里で別の国があるが、それは女王国の人と同じ倭人である。海を渡ること 1,000 余里であるから、水行の距離が 1,000 里から 1,500 里の程度である。現在の距離で言えば、80km から 120km 程度となる。末慮国の港から 80~120km は、現在の地名で言えば下関あたりで、中国・四国（瀬戸内海）地方の入り口を指している。したがって、『魏志』は、ほぼ九州地方を記述していること、および、以下に述べるように、九州島の南方にある国々について特に記述している。もし、邪馬台国が近畿地方にあるとすれば、その南方の国を記述することは理解がしにくい。

3.5 「また、侏儒国がその南にある。人の丈 3~4 尺、女王を去ること 4,000 里。また、裸国・黒齒国がその東南にある。船で 1 年かかりで着くことができる」

『魏志』には、侏儒国が女王国のあるところから南方 4,000 里にあると書かれている。この場合、邪馬台国からというより、九州南端から南方向に 4,000 里程度と解することが妥当である。4,000 里といえば、現在の距離で 320km 程度である。この距離に近い島は奄美大島である。したがって、奄美大島の可能性もあるが、むしろ、歴史的に見ても人口の多かった沖縄本島を想定した方がよいであろう。沖縄本島までは九州南端から 500km を超えるが、当時の距離の認識精度から言えば、十分検討の範囲に入るだろう。特に、そこに住む人々の身長が低いと表現されているが、現在でも沖縄の人々は、日本人の都道府県別平均身長では最も低く、都道府県別平成 20 年度調査時データ（17 歳）によると、男性の平均身長は 170.7cm、最大値は富山県の 171.8cm、最小値は沖縄県の 168.9cm、女性の平均身長は 158.0cm、最高は神奈川県 of 159.2cm、最小は沖縄県の 156.2cm となっている。地域的な平均身長の差の原因は気候等とされ、日本の最も南方に位置する沖縄県の男性女性とも平均身長が低いことは納得される。食生活を含め、時代が進むにつれ文化が平均化され、平均身長差も減少すると推定され、弥生時代には、現在よりも、平均身長差がもっと大きかった可能性もある。また、実際の身長差はそれ程大きくはないが、そのようなことを特に強調したのではないか。中国の書物では、物事を過大あるいは過小に記述することは珍しくない。

そして、さらに南東（南西ではないか）方向に、水行で 1 年もかかるところに、裸国・黒齒国がある。非常に遠方と記述されている距離（水行の日数）がどの程度かはわからないが、裸でくらし、歯を黒く染めている人が住む国があると記されている。これは九州よりもかなり南方の印象である。南方にある大きな島としては台湾とフィリピン・ルソン島が想定されるが、中国の書が、中国大陸近くの台湾と誤認することは考えにくいので、裸国・黒齒国はさらに南のルソン島ではないか。九州島南端からフィリピン・ルソン島まではおよそ 1,500km である。末慮国の港から九州島南端までの距離はおおよそ 300km 程度であり、これに要する日数が 20 日であるから、距離の分だけ伸ばせば、100 日程度で着けることになるが、『魏志』ではこれを 1 年がかりで行くと想定している。1 年という数値は実

数ではなく、これまでにでてきた各地までの距離に比較して非常に遠いという意味であるう。

3.6 福岡・朝倉の地名と奈良・大和の地名との不思議な一致

以上で述べてきたように、『魏志』の示す方位や距離（移動日数）を大きく変えることなく、邪馬台国は九州島内陸部とくに有明海東側の内陸地域にあると考えるのが最も妥当ではないか。基本的には、古代においては、方位に関しては大きく誤る可能性は少ないが、距離に関しては大きな誤差を含まうる。

そのように考えると、邪馬台国の位置として最も可能性が高い地域は、筑後平野の中央部に位置する、現在の久留米市から朝倉市にかけての地域が想定される。そうであれば、それをよく説明するのではないかとと思われる特異な地理的データが存在する。それは、**福岡・朝倉の地名と奈良・大和の地名との不思議な一致**である。それを示したのが**図 3**である。図中左側は九州北部地方特に福岡県の朝倉市周辺の地名の配置を示したものであり、図中右側は、奈良県の大和郷の周りの地名を示したものである（安本、2012）。両図を比較すると、説明の必要のないほど多くの似た地名が似た方位で順序良く配列されており、両者が全く偶然にそのような地名配置になったとは考えにくい。むしろ、どちらかがどちらかを模したという方が合理的である。

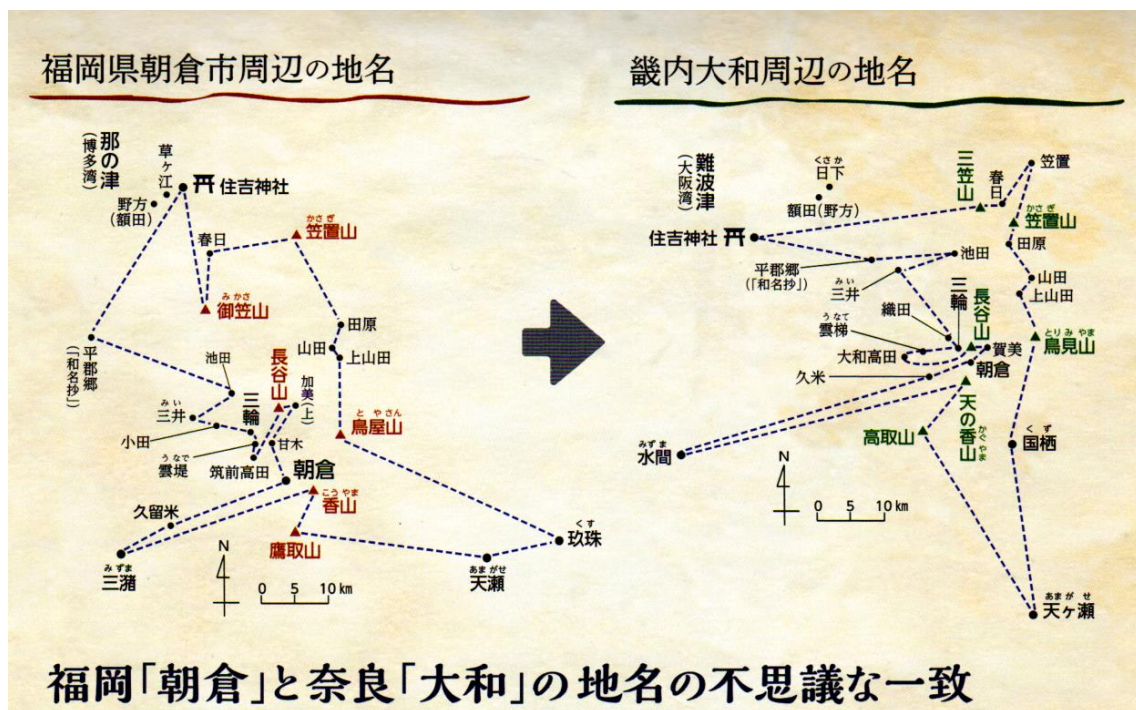


図 3 福岡・朝倉周辺と奈良・大和周辺の地名配置の対比（安本、2012、原図は、福岡市観光連盟作成のパンフレット「福岡古代ロマンの旅～邪馬台国時代編～ 邪馬台国は福岡にあった」）。

この場合、どちらがどちらを模したのか。洋の東西を問わず、何らかの事情で、ある人々のグループがある地を去り、新たな地に移住したような場合、似たような地名を付けることは枚挙に暇がない。わが国で言えば、明治以降、本州の各地から北海道に集団で移住した場合、元の地名あるいは元の地名を基にした地名を付ける場合が多い。外国の場合でも、大英帝国の人々がアメリカやニュージーランドに移住した場合、そのような例が多い。そして、多くの場合は、1つあるいは少数の地名が移される場合がほとんどである。

しかし、ここに示した福岡・朝倉の地名と奈良・大和の地名とにおける、これほど多数の、方位も含めた対応は驚くべき現象である。このような対比が可能であることは、単に、ある人々のグループが何らかの理由により移住したというだけでなく、もっと深い根源的な理由があるのではないか。それを考えさせる事項が記紀にみられる「邪馬台国東遷説」である。わが国の国土統一黎明期の歴史あるいは神話を記述した記紀には九州の勢力が近畿に移動し、出雲経由で、大和地方に入り、新しい勢力を形成し、やがて、その後の日本国家の歴史につながっていくことを示したことが記されている。

すなわち、福岡・朝倉と奈良・大和の地名の一致は、北部九州の勢力が奈良・大和に移動後、その記憶を残すために、出発地の地名を新たな土地に付けたのではなかろうか。もちろん、記紀に書かれていることは事実そのものを記したものではない。むしろ多くは、事実ではなく創作に属すると言った方がよい。しかし、神話の中に重要な史実の一部が反映されたと考えることは十分可能である。本論では、「邪馬台国東遷説」を一つの有力な仮説として、議論する。この仮説を受け入れられない有力な事実が明らかにされれば「邪馬台国東遷説」は捨てることになる。それが仮説というものである。

なお、九州北部の地名が元ではなく、奈良の地名が元であり、奈良の勢力が九州北部に移動したという仮説も成立しうる。しかし、この場合は、奈良に大和政権が成立した後、その勢力が九州北部に及ぶことによって、地名の移動が起こった可能性が考えられる。この場合には、奈良から九州以外の地域に同様な傾向が発生する可能性があるが、そのような例は認められないようである。ところで、洋の東西を見渡して、人々の大移動に伴う地名の移動は、新天地に向かうという状況が圧倒的に多く、このような観点からは、奈良の勢力が九州北部に移動したため、第3図にみられるような地名の一致が見られるという可能性は低い。また、記紀の記述からもそのようなことは想定されない。

4.安本美典氏の邪馬台国朝倉説と東遷説

邪馬台国に関する多くの書籍を筆者は読んだが、その中で論理的に書かれており、その内容が筆者の頭に入りやすかった二人の著者がいたが、それは森 浩一氏と安本美典氏の著書であった。とくにこの両氏はごく自然に論理を展開されているように感じた。そして、森 浩一氏および安本美典氏ともに、偶然「東遷説に基づく邪馬台国北九州説」に立っておられた。

なお、邪馬台国近畿説に立っておられる研究者の中にも、比較的論理的に展開されてお

り、その内容が筆者の頭に入りやすかった著者がおられたが、それらは、寺沢 薫氏と石野博信氏のお二人であった。残念ながら、両氏の説には与しないことにはなったが論理的で筋の通った研究者と感じられた。

さて、おそらく、森氏及び安本氏の影響が強かったと思われるのであるが、筆者にとって、いろいろな書籍を読む中で、「東遷説に基づく邪馬台国北九州説」がもっとも可能性の高い仮説に思われるようになった。著者は、アマチュアとして、邪馬台国問題に強い関心を持つものであり、自ら発掘したデータ等を通して自説を立ち上げるものではなく、すでに提案されている多くの説の中で、自ら邪馬台国に関して独学した結果と自らの自然科学の研究の経験を基にして、もっとも合理的と考えられる仮説を選択したいと思っている。本書の最後に、少しでも自説と言うものを含めたものを披歴したいが、その前に、ほぼ全面的に支持している、「東遷説に基づく邪馬台国北九州説」のなかでも、特に「東遷説に基づく邪馬台国甘木・朝倉説」を提案する研究者の代表的な方である安本美典氏の所説（たとえば、安本、2012）に対する筆者の理解を簡単に紹介しておきたい。

安本氏はもとの日本古代史に関する歴史学者ではないが（もちろん、そうであっても、現在までにいたる長年のキャリアは他の古代史研究者に比べ、勝ることはあっても劣ることは全くないと思われる）、その統計学的な学識をもとに、出来るだけ古代史に関するデータを客観的（数值的）に扱い、多くの新たな視点を提案するとともに、文献史学的、考古学的知識も極めて広範である。さらに、わが国の代表的な古代書である古事記・日本書紀に関する見解も極めて妥当である。すなわち、古事記・日本書紀は事実を記載した歴史書ではなく、また、神話的要素が多いことも確かであるが、わが国の古代史を解明する上において、重要な文献であり、全く捨て去るべきではなく、必要なものを読み解くべきであるとお考えのようである。これらには全面的に賛成である。

安本氏の「東遷説に基づく邪馬台国朝倉説」におけるもっとも大きな特徴は、すでに紹介したが、朝倉地域の地名群と奈良の地名群の奇妙な一致を根拠の1つとしていることである。この地名の一致は、安本氏が最初に指摘したことではないが、重要な論拠の1つとしておられるようであり、筆者が同氏の説に強く惹かれるのも、ここに大きな原因がある。他の古代史研究者は、この地名の一致をあまり表に出して議論されていないが、この地名の一致を著者は非常に重要と考えている。

一般に、古代史に関するデータというものは、いわゆる自然科学におけるデータとは意味合いがかなり異なっているように思われる。遺物・遺跡そのものは客観的なものであるが、それに意味を持たせることにおいては、解釈がかなり重要な部分を占めるようである。自然科学の場合においても、観測データの解釈が重要であることは論を待たないが、考古学的データの場合に比べ、観測されたデータそのものが果たす役割が、自然科学の方が、より大きいように思われる。その辺が、考古学においては、多様な議論を生む要因になっているように感じられる。このような中で、地名の一致は、自然科学で得られるデータに比較的近いのではないかと感じられる。そのような意味から、地名の一致を重要視される

安本氏の考え方に賛成である。特に筆者は、邪馬台国の位置の比定においては、この地名の一致をさらに最も重要な根拠と理解しており、筆者が「東遷説に基づく邪馬台国朝倉説」を支持する最大の理由である。

5. 東遷の理由考

わが国の古代史において、弥生時代までは、日本の先進地域は九州の北部地域にあり、古墳時代以降は、近畿の奈良地域にあったことはほぼ確かである。すなわち、弥生時代から古墳時代にかけて、日本の政治・文化の中心地域が移動した。弥生時代後期の九州北部の先進地域が何らかの理由で忽然と姿を消し、古墳時代初期の近畿の奈良地方は何らかの理由で忽然と先進地域として姿を現すように見える。

しかしながら、このような不連続が出現したことは非常に理解が難しいが、その1つの解決をもたらすものが、記紀に見える「東遷説」と言える。このように考える時、「東遷」の理由はいったい何であろうか。実は、これまでの研究からは、「東遷」の理由は十分解明されたとは言えない。たとえば、以下のようないくつかの記述が文献にみられる。

古事記に、「東に美し国あり。我いざこれを討たん」という表現があり、これをもとに東遷の物語が展開されている。しかし、「美し国があるから、討つ」という理由でははなはだ心もとない。あるいは次のような見解も見られる。「このように（戦争状態にある狗奴国と女王国とを一つにまとめて倭国にするというように）安定した倭国とするために、元の女王国の主力を東方の地であるヤマトへ遷すことが計画され実行されたのが九州北部勢力の東遷であった。」（森 浩一、2010）。しかし、この説も説得力が強いとは言えない。

一方、次のような見解もある。武帝の死後、晋朝は急速に弱体化し、それに伴って楽浪郡、帯方郡、朝鮮半島も乱れ始めた。291年以降は東夷の国々からの朝貢や内附もなくなった。このような中で、大陸に近い九州北部にある倭国も常に緊張状態にあった。ヤマト国（邪馬台国）も西方の外敵から防御するため、その都をもっと安全な地に移す準備をしたと考えることができる。その地が大陸からもっと遠い東方の地で西方の外敵からの防御に好適な大阪湾付近を考えたのではないだろうか というものである（中村武彦、2013）。しかし、この説も説得力が強いとは言えない。

上述したように、従来から、いくつかの東遷の理由が挙げられているが、いずれも、根拠は薄弱である。政治的、経済的、あるいは社会的な理由ではないとしたら、他にどのような理由が考えられるか。そのような理由の1つとして考えられるものに、弥生時代末期の気候の寒冷化がある。実は数理考古学者の新井 宏氏が、炭素14年代法について考えるディスカッションの中で、次のように述べていることが紹介されている（安本、2014）。安本氏は、饒速日の命の東遷年代を、西暦260年～270年前後、神武天皇の東遷年代を、280年～290年前後との自説を紹介した後、新井氏の意見を以下のように紹介している。「三世紀の後半に、大きな変化があったという見方は、考慮に値します。今日の炭素14の件でも、グラフが何回も出ておりましたけれど、西暦260年から270年のところにキューと下がっ

て、そこから上がる場所があります（図 4）。もう定説と言って良いと思うんですが、炭素 14 の年代が下がるというのは寒冷期なんですね（なお、寒冷期を避けるため、九州より寒冷な北東方に移動することも考え難いが）。ものすごく寒くなっている。いくつかの理由があります。炭素 14 ができる現象と、もう 1 つは海の流れの現象、いずれをとっても、そういう解釈というのは、非常にリーズナブルなんです。さらに、続ける。「寒冷期って何が起こるかだいたいわかりますよね。世界中で争乱とか移動などの大きな変化が起きています。是非、この事をご参考にされたらよろしいんじゃないかと思います。」（情報考古学、Vol.19 No.1-2、2013）。東遷の理由が「気候寒冷化」による可能性があるというのである。「東遷」の理由に関して、有力な政治的・経済的・社会的理由が見つからない現在、「寒冷化」という自然的理由も 1 つの選択（仮説）として考えても良いのではないかとも思うが、寒冷化を避けて、相対的に寒い北東方向に移動することは考えにくいのも確かである。

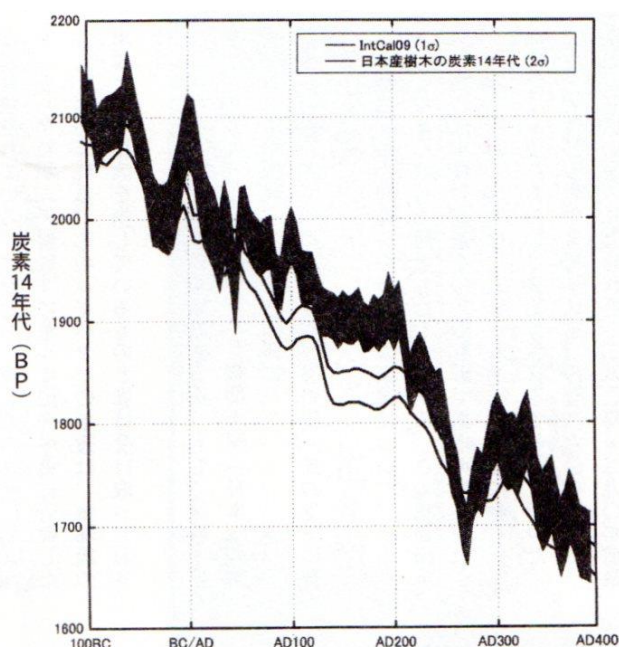


図 4 日本産樹木年齢の示す炭素 14 年代と IntCal109 との比較（国立歴史民俗博物館研究報告、第 163 集、2011 年 3 月刊。安本（2014）より転載。

さらに別の考え方も可能である。単なる地理的制約である。日本列島は南北ではなく、東西に長い。そして九州は日本列島の西端にある。したがって、新天地を求めようとすれば、西ではなく、東に向かわざるを得ない。この場合は、新天地を求める理由が必要である。

以上を含め、東遷の理由としては、決定的なものが見つからない。これらの中の 1 つか、あるいは複合された原因があったのかもしれない。東遷論はまだ議論を深める必要がある。

6. 私（江原）の「東遷説に基づく邪馬台国 福岡・朝倉説」の提案

以下で述べる私の「東遷説に基づく邪馬台国 福岡・朝倉説」は、学問的な意味において、新たな学説を提案するというのではない。むしろ、独学の結果から、今、どのような考え、いやむしろ、今、どのような思いにたどり着いているかを記すことと言ってよい。論証がまだ完全ではなく、論文と言うより随想と言うべきかも知れない。ここにアマチュアとしての限界と楽しみがある。ただし、著者も、長年自然科学に携わり、多くの論文を書いてきた者であり、それを踏み外さないようにしたい。

出発点は『魏志』である。繰り返し、『魏志』を読む中で、自ら振り返り点をつけながら、『魏志』の原文から、その意味を理解できるようになってきた。そして、従来にはない解釈もあり得るのではないかと思っている。

『魏志』を繰り返し読むうちに、記述されている領域の距離感のようなものが感じられるようになり、ある時点から、邪馬台国に関して記述されていることが、とても近畿地方にまで及ぶような遠方のことではなく、九州特に北部地域に限定されている感じが強くなった。

一方、従来の解釈において、方位あるいは距離の記述を簡単に変更し、自説を展開するやり方には強い違和感を覚えた。ある方位あるいはある距離の記述を誤りとする一方、他の方位あるいは他の距離を現代感覚で理解しているような記述に会うとこれまた違和感を覚えた。

科学の分野によっては、きわめて定量的に高精度の議論が可能な物理学のような分野もある。筆者が専攻した地球物理学の分野でも、基本を物理学においているが、多様な面がある。たとえば、地球の引力である重力は相対誤差が 10^{-9} 程度の高精度（地球重力は 10^3 程度であるが、マイクロ (10^{-6}) ガルの差を議論することもできる）の議論が可能な場合もあるが、ある長さに関する数値が、10mか、100mか、あるいは 1,000m程度であるというオーダーの議論しかできない場合もある。たとえば、地球外の遠方の観測者が、地球人の身長を何らかの方法で推定したとき、たとえば、「170. 2cm」というような健康診断で出されるような数値ではなく、また、「10cm でも 10mでもなく、1 mの程度である」というような場合である。すなわち、オーダーの話をしているのか、もっと細かい話をしているのか、時々疑問に思うような議論が古代史の話の中には出て来る。『魏志』を読む時もこのような注意が必要と感じた。

さて、以上のような判断基準を持って『魏志』を読む時、方位や距離を無理に変更することなく、邪馬台国は九州とくに九州北部地域に収まる。九州北部地域の中で、邪馬台国がどこに位置するかについては、人口規模からいえば、一定の面積が必要であり、有明海東岸から久留米市を通り、朝倉市方面に至る筑後平野がもっとも有望で、特に、福岡県朝倉市周辺地域の地名群配置と奈良・大和地域周辺の地名群配置との不思議な一致をみると、朝倉市地域は重要な候補となる。この地域周辺には、卑弥呼の墓に相当するような古墳はないと言われているが、この地域で発見された平塚川添遺跡の発掘も完全とは言えず、今後の新発見の可能性がないとは言えない。なお、朝倉市山田の恵蘇八幡宮の御陵山（円墳）

が卑弥呼の墓ではないかとの指摘がある（河村哲夫氏、私信）。卑弥呼の埋葬に当り、その棺は真っ赤な朱で満たされたのではないかとの推定もある（市毛、2016 の中に紹介されている、動物学者福岡伸一教授の指摘）。なお、その後、著者らは、御陵山の水銀探査を実施したが、地表で楕円状（長径約 40m、短径約 20m）の高水銀濃度異常を検出した。全邪馬連の HP の「私の古代史論」に投稿済（2019 年）である。江原・野田・清水「福岡県朝倉市山田にある恵蘇八幡宮の墳墓状構造（御陵山）の水銀調査報告」。また、卑弥呼の墓も直径百数 10m という大きな前方後円墳ではなく、直径数 10m 規模の円墳である可能性もある。恵蘇八幡宮の円墳はちょうどこの程度の規模である。

邪馬台国時代の遺跡・遺物、特に鉄器・絹などは、九州北部地方に圧倒的に多いが、近畿地方に見るべきものは少ない。弥生時代は、現在の朝倉市を中心とする九州北部地方が圧倒的に先進的であることは考古学的にほとんど確かである。一方、古墳時代以降、政治・文化の中心が、近畿地方に存在したことも万人が認める。弥生時代後期の政治・文化の中心が九州の北部地方にあり、それに続く古墳時代の政治・文化の中心が近畿の奈良地方にあることの不連続性をいったいどのように理解すべきか。九州北部の政治と文化が忽然と衰退し、近畿の政治と文化が忽然と隆盛になる中で、日本（倭国）が継続性を持って発展したとはなかなか考えにくい。しかしながら、銅鏡等の墓への埋設物には、九州の北部と近畿の奈良とは連続性（九州北部からの風習の伝播）があると指摘されている（森、2010）。九州北部から近畿への見掛け上の不連続性の中で、連続性を示すものも見られ、特に、墓への埋設物という、本来、保守的な考えが反映されやすいものに連続性が見られることは重要なことではないか。

このわずかな連続性を文献的に反映しているのが、記紀にみられる、神武東遷説ではないだろうか。ただ、東遷説の最大の問題は、納得できる合理的な東遷の理由が見つからないことである。東遷説に関するいくつかの文献を注意深く読んだが、納得できるような合理的な理由が見つからない。政治的、経済的あるいは社会的な理由が見つからないとすれば、自然的原因も考慮することが考えられるが、想定しうる原因として、この時期に一致して想定されるものに気候の寒冷化がある。民族移動のようなものに寒冷化がきっかけになることは十分予想されるが、現状では積極的な理由に挙げられるまでには至らない。また、以上とは異なり、単に地理的理由かもしれない。日本列島は南北というより東西方向に広がっている。九州地域は日本列島の西端にある。したがって、新天地を目指すには東方しかない。東遷の理由は意外と簡単なことなのかもしれない。しかし、この場合には新天地を目指す合理的な理由が必要である。いずれにしても、東遷説は魅力的な仮説であるが、その理由を含め今後いっそうの検証が必要である。

以上をまとめてみると、『魏志』の解釈、福岡・朝倉地域の地名群と奈良・大和地域の地名群との奇妙な一致、記紀には古代史の一定の反映があること等を考えると、「**東遷説に基づく邪馬台国 福岡・朝倉説**」は魅力ある仮説であるが、明確な東遷の理由が見いだせないことから、まだ、積極的に提案するところまでは行かない。すなわち、仮説の段階である。

今後は、ここに1つの焦点をあてて研究を進めたい。

7. おわりに

以上で、『魏志』にある邪馬台国は九州北部地域にあるとした。さらに突き詰めて言えば、福岡県朝倉市にあるとした。すなわち、現時点における著者の想定する邪馬台国の位置は福岡県朝倉市である。まだ、論考の余地はあるが、ひとまずここで終えたい。

参考文献

- 市毛 勲 (2016) 朱丹の世界、ニューサイエンス社、167p.
- 小澤 毅 (2020) 『魏志』が語る狗奴国と邪馬台国の位置、季刊邪馬台国、139号、6-17.
- 江原幸雄・野田徹郎・清水 明 (2019) 福岡県朝倉市山田にある恵蘇八幡宮の墳墓状構造(御陵山)の水銀調査結果報告、全邪馬連、HP「私の古代史論」.
- 小山修三・杉藤重信 (1984) 縄文人口シミュレーション、国立民族学博物館研究報告、9巻1号、1-39.
- 関川尚功 (2000) 近畿大和説からみた狗奴国、季刊邪馬台国、139号、45-60.
- 中村武彦 (2013) 邪馬台国の真相、東京図書出版、205p.
- 田辺昭三 (1968) 謎の女王卑弥呼、徳間書店.
- 布目順郎 (1988) 絹の東伝、小学館、290p.
- 森 浩一 (2010) 倭人伝を読み直す、筑摩書房、217p.
- 安本美典 (2012) 古代史論争最前線、柏書房、230p.
- 安本美典 (2014) 邪馬台国は銅鐸王国へ東遷した一饒速日の命、北九州から畿内へ一、季刊邪馬台国、121号、6-100.
- 安本美典 (2015) 邪馬台国は99.9%福岡県にあった、勉誠出版、349p.
- 安本美典 (2020) 狗奴国=肥後熊本説-もっとも根拠が多く可能性の大きい説、季刊邪馬台国 139号、18-44.